

上に布巾をしきて、其上にならべて、又上に蒸籠のふちに布巾をねはひて、木蓋をしてむすべし、時間は十分間にてよし、

○包む時、出来るだけ薄くつゝむをよしとす
つねの饅頭の製の種類にして略製をばまんぢうといふ物の拵方なり、其皮へ紅彩色にて日の丸をゑがきて用ふ、これも新年の山の意なるべし

新年歌

新年山 後子

年たちて御代をことほぐ例には

まづ仰がるゝ高千穂のやま

新年天

いかのほり高くのぼりて大空も

にぎは、しげに年立ちに覺

新年鶴

あられたまの年の光もさしそひて

わざ日にきよしつるの毛衣

新年鶯

世のひとの心は春になりぬとや

年たつ庭にうぐひすのなく

早春梅

春もまたしらすやあらん我宿の

わたくしものゝうめの初花

新年山三首

東基吉

新らしき御代の光のてりそひて

のとけき春の満洲の山

兵の血しほそゝぎしわとさえて

のとかに見ゆる二龍山はも

昨日までしこくさ生ひし山の端ゆ

けさうつくしく上る朝日子

夜の思

林 壽 祐

蒼天高く且つ廣し

夕雲たゞよふ西の空

日は入り果て、影くらし。

宵の明星さきがけて

雲間をいづれば満天の

星は黄金を布けるごと。

月はやがてひんがしの

海の面より冴え上り

榮華の庭も賤が屋も

あまぬく照らす神の業』

* * * * *

噫しづかなる夜半の色

星も眠るか聲はなし

下界の響もをさまりて

月に鳴き行く雁の聲

仰げば高し天津そら

思へば尊うとし神の業

縦合や此身は低くとも

魂は清けき汝が姿

ミュージズの神の御前に

吾を導け月よ星』

フレーベル會俳句端書集

一、課題 春季雜吟一人十句以下

一、締切 一月二十五日限り